# 福沢祐巳の消失

－イラストなし版－

十二月。期末試験、クリスマス、冬休み、大晦日。師走というだけあって、今月はたくさんのイベントが待っている。

中でもみんなが一番待ち焦がれてるイベントといえば、クリスマスイブだろう。各々がイブの予定を立て、嬉々としてる。そんな折、祥子は祐巳に問いかけていた。

「今年は期待してていいのかしら？」

「はい、バッチリです。期待しててください」

「そう、楽しみだわ」

今年は素敵なクリスマスイブになりそう。出来る事なら時計の針を進めてでも早くクリスマスイブにしたい。あ、そんな事したら祐巳と過ごす時間が減っちゃうか、なんて事を考えられるくらい平穏な日常だった。

この次の日、一二月八日、冬は始まったばかりだというのに、祥子を真冬の雪山で遭難したような、絶望のどん底に突き落とすことが起きた。

あらかじめ言っておこう。

それは祥子にはちっとも笑えない事だった。

昼休み。薔薇の館で祥子と令は二人きり、お弁当を広げてクリスマスパーティーについて、あれこれ話をしていた。

「それでね、祐巳ったら、今年は絶対手作りするって言うのよ」
「祐巳って誰？」
「珍しいわね、令がそういう冗談を言うなんて」
「いや、冗談じゃなくて本当に知らないんだ、その祐巳って人」
「度が過ぎると、いくらあなたでも怒るわよ」
「落ち着いて祥子、勘違いって事もあるじゃない？　私に紹介したつもりで他の人に紹介してたとかさ」
「あなた……何を言ってるの？」
その時、ビスケット扉が静かに開き、一人のリリアン生徒が入ってきた。
「遅くなってごめんなさい、三人でお昼食べようって約束だったのに」
「ああ、いいよ気にしないで、祥子がお腹空いたってうるさいから、先に食べ始めちゃった」
旧知の仲のように、その生徒と令は談笑していた。祥子は扉から現れたその三人目が、一瞬誰だか判らなかった。いや、確かに祥子は知っている。この場合、信じられないと言うべきか。ここにいるはずの無い人物だった。
「どうして……あなたがここに……」
「どうしたの祥子？　幽霊でも見たような顔してるわよ、三日間風邪で休んだだけじゃないの」

「久しぶりに紅薔薇さま、黄薔薇さま、白薔薇さま、顔合わせだけどね」
「仕方ないじゃない、ただでさえこの時期は忙しいんだから。ああ、私とした事が風邪で大事な喉を痛めるなんて」
「白薔薇さま？　あなた達、何を言ってるの？　白薔薇さまは志摩子じゃないの」
「おいおい、今日の祥子おかしいよ？　さっきからユミだとか、白薔薇さまが志摩子だとか」
「そうね、私が薔薇さまにならなかったら、志摩子さんが白薔薇さまになってたのかもね」
「いいかげんにして！」
祥子はテーブルの脚が折れるのではないかと思えるくらい、激しく両手で机を叩き、目の前にいる三人目に言い放った。
「静さん、どういうつもりなの？」
扉から現れた三人目、『白薔薇さま』こと蟹名静は、確かに祥子の目の前にいた。
「どういうつもり何も意味が分からないんだけど」
真顔で答える静の横を、祥子は唇を噛みしめたまま無言で通り過ぎ、薔薇の館を飛び出した。

「祐巳、祐巳どこなの!?」

これはみんなで私を騙そうというサプライズだ。祐巳を問い詰めれば、きっと白状する。以前、花寺のメンバーとの顔合わせ作戦だって祐巳だけは私に打ち明けてくれた。今回も同じに違いない。

見知った背中が二つ見えた。そうだ、この二人でもいい。白状しろと命令すれば、下級生は絶対服従のリリアンでは従うしかない。「志摩子、乃梨子ちゃん」

「紅薔薇さま!?」

私は志摩子の手を握りしめて、祐巳を見かけなかったかと尋ねた。

「ごめんなさい、紅薔薇さま。私はその祐巳さんって方は存じませんわ。あ、上級生だったら祐巳さまですわね、失礼」

「志摩子、あなたまでふざけるつもりっ!?」

握っていた志摩子の手に、そのまま力を込めた。痛がる志摩子から私の手を引き離したのは隣にいた乃梨子ちゃんだった。

「何をなさるんです紅薔薇さま、志摩子さんが怯えてるじゃないですか」

「乃梨子ちゃん、誰の差し金か知らないけど、あなたまで私を騙そうっていうの？」

「あれ。私をご存じなのですか？」

「乃梨子、紅薔薇さまなら1年生の主席の名前くらい存じていても不思議は無いわ」

「それもそうか。でも、いくら紅薔薇さまだからって、志摩子さんを呼び捨ては横暴すぎない？」

「ほら、私は1年生の時、山百合会のお手伝いをしていたから、その時のご縁で」
芝居もここまでくれば、怒る気にもなれなかった。他を当たる事にした。

二年松組の教室の前。もうすぐ午後の授業が始まる時間だった。ここなら間違い無く祐巳に会える。なかなか楽しませてくれるサプライズだったじゃないの、企画者は誰かしら？　祐巳に会って色々聞き出そう、そして祐巳に会っていつもの日常を取り戻そう。そんな期待を込めて教室の扉を開けた。
「祥子さま？」
聞き覚えのある声。その主は確かに私が知っている人物だった。
「由乃ちゃん」
たった一人ポツンと席に座っていて、他には誰もいなかった。代わりに机の上や椅子には、リリアンの制服が無造作だったり、きちんと折りたたまれてたり、様々な姿で置かれていた。
「次、体育の授業だから。私はいつものように見学……なんですけど、今日は寒いので教室に」
祐巳の姿はここに無かった。
「祐巳を……見かけなかったかしら？」
「ユミ？　弓道部にでも入られたんですか？」

祐巳の事を尋ねても、やはり由乃ちゃんは首を横に振って、知らないとしか答えなかった。
「由乃ちゃん……あなたは私の事を知っているのかしら？」
「はい、存じています」
「それは紅薔薇さまとして？」
「いいえ、小笠原祥子さまとしてです、お姉さまの親友ですから」
「由乃ちゃん、あなたは生まれつき心臓が弱くて、いつも従姉の令が付きっきりで、高等部に入ってすぐ令からロザリオを受け取って、そのロザリオを突き返して、心臓の手術をして丈夫になって、ロザリオを再び受け取って、剣道部に入って、お姉さまである令をいつも尻に敷いて、江利子さまと張り合って、見知らぬ中等部の子を妹候補とみんなに紹介した」
「これが私が知っている由乃ちゃん。違っていて？」
「ごめんなさい」
由乃ちゃんは弱々しく謝った。
「最初の心臓が弱くて、高等部に入ってすぐ令ちゃんからロザリオを受け取った、までは合ってます」
「ご覧の通り、私の心臓は弱いまま。そんなロザリオを突き返すだとか、いつも迷惑かけてる令ちゃんを尻に敷くだとか、そのお姉さまである江利子さまと張り合うだと

か、そんな恐れ多い事できるわけがありません」
「ましてや見知らぬ中等部の……」
「もういいわ」

ここまで徹底されているのなら、惚けられない証拠を見せつけるべきだと考えた。
「祐巳の席はここだったかしら」
祐巳の席と思しき机を調べてみた。あるのは鞄、教科書、筆箱、かわいい巾着に入った弁当箱、適当に折りたたまれた制服。
「祥子さま何をなさってるので？」
「証拠を探してるのよ、ここが祐巳の机だって」
「そこは、桂さんの席です」
「それじゃあ、祐巳の席はどこなの？」
「だから……そういう人はいませんって……」
「そんなはずは無いわっ！　いたのよ、ここに！　間違い無く！　どうして私を騙そうとするの!?」
「だ、騙す？　何をおっしゃってるんです？　紅薔薇さま」
何の得があって、みんなで私を騙そうとしているのだろう？　目の前にいる由乃ちゃんもそうだけど、今まで会った人全て真顔だった。演劇部の瞳子ちゃんならいざ知ら

ず、全員がここまで完璧に知らないふりって出来るものなのだろうか？
頭が錯乱してきている。祐巳の事は夢でも見ていたのではないかと。いや、そんなはずは無い。おかしいのは世の中の方だ。
ここに来る途中、二年桜組の教室が丸ごと消えていた。生徒や教師に尋ねても桜組なんて無いと。二年だけ桜組が存在する事を伝えたらみんなから怪訝そうな表情をされた。一クラスまるごと消えてしまっているなんて、どう考えても有り得ない。桜組の生徒達はどこへ？
ふと、机の上にタオルが置いてあるのが目に止まった。タオル……何だろう、重要なキーワードが隠されている気がする。
「ああっ！」
なんて事だろう、薔薇の館から出る必要は無かったのだ。

薔薇の館の一階へ戻った。倉庫と化してる部屋で、私はあるものを探した。
「確かこの辺に……あったわ」
お姉さま方の送別会で使った小道具が入った箱。祐巳が存在していた確かな証拠が、この箱に入ってるはず。祈るような気持ちで箱の中身を探した。カセットテープに、『あっぱれ』と書かれた扇子、どじょうすくいのカゴ、次々にアイテムが出てくる度に、期待から確信へと変わっていった。そして、一枚の布を見つけだした。

祐巳が『安来節』を踊った時に、豆絞りで被っていた手ぬぐいだ。ぐしゃぐしゃになっていた手ぬぐいを広げると『福沢』と名前が書かれていた。やっぱり祐巳は存在したのだ。

よく見ると名前以外にも何か書いてある。

『鍵をそろえるべし。期限は二日後』

鍵？　二日後？　鍵って何かしら、期限は今日が八日だから、十日までって事かしら。世界がおかしくなった前日に書いたものであろうから、九日の事かもしれない。

私は薔薇の館の外へ出た。扉の鍵穴を見つめながら考えたけど、揃えるって事は複数あるって事よね。薔薇の館の鍵は一つしか無いので、こういう鍵の事では無いのかもしれない。

そんな考えを巡らせていると、ガサッと木陰から物音がした。

「隠し撮りは感心しないわね」

「いやあ、さすがは紅薔薇さま。お気付きでしたか」

「あなたは写真部のエース、武嶋蔦子さん」

「ご名答」

鎌をかけたつもりだったが、この世界でも蔦子さんは写真部のエースで合っているようだ。いや、もしかすると蔦子さんは、このサプライズに関わってない可能性だっ

てある。みんなが私を騙してるという可能性はまだ残っているのだ。
「蔦子さん、祐巳がどこにいるかご存じ？」
「ユミ？　人の名前でしょうか。フルネームでおっしゃっていただけると心当たりがあるかもしれません」
「福沢祐巳、この名前に聞き覚えは無くて？」
「あります」
どうせまた期待した答えは返って来ない。うんざりしていた。え、今なんて……？
「蔦子さん、よく聞こえなかったわ、もう一度言っていただけるかしら？」
「福沢祐巳という名前に聞き覚えあります」
「祐巳はどこ!?　どこにいるの!?」
「ちょ、ちょっと落ち着いてください紅薔薇さま、痛っ、痛い」
「ああ、ごめんなさい」
私は蔦子さんの両肩を掴んで力任せに迫っていたようだ。
「私も中等部まで同じリリアンだったってだけで、クラスが一緒になった事は無いので、人伝に聞いた情報なんですけど」
「真偽はいいわ、どこなの？」
「花寺学院です」
「花寺？　呆れた、そんなところへ逃げ込むなんて」

「あ、家庭の事情があったみたいですよ、弟さんも同時進学で大変だから、同じ花寺に入学したって聞きました」
「入学？　何を言っているの？　花寺は男子校でしょう？」
「去年から共学になったらしいです」
「まあいいわ、そこに行けば祐巳に会えるのね」

花寺の校門前。違う学校の生徒がいるってだけでも相当目立つ。小笠原祥子は同じ学校であっても目立つ存在。校門から出てくる生徒がもれなく祥子に目線がいっているのだ。それも出てくるのは男、男、男ばかり。共学という設定では無かったのだろうか。

何度も気分が悪くなって、戻ろうという気にはなったけれど、祐巳に会うまでは絶対戻らない。そう誓っていたから、この状況に我慢できていた。

どれほど待ち続けただろうか、待望のお目当ての人物が段々近付いてきた。

福沢祐巳。

やっと――見つけた。

制服が違っていた。花寺だから制服が違うと言われれば当たり前だけど、女子制服はブレザーだった。

芝居にしては手が込んでいる。これは夢？　それともまさか……別世界？
祐巳の隣にもう一人。あの子は見覚えがある。名前は確か……有栖川。祐巳と同じ女子の制服だった。
この世界では完全に女の子なんだろうか、いや、今はそんな事どうでもいい。
これだけ注目されてるというのに、向こうはこっちに気付いてる様子もなく、目の前を通りすぎようとしていた。嫌な予感がした。やはりここは別世界で、祐巳は私が知っている祐巳では無い。別の祐巳なのではないかと。今さら他人行儀の祐巳なんて見たくない。　声が出ない。でも、ここで呼び止めなければ、次の機会は無いかもしれない。
「お待ちなさい」

なんとか声がでた。祐巳は立ち止まり、私の方を見た。私は次の言葉が出ず沈黙してしまった。
「何かご用で？」

明らかに知らない人を見るような表情。祐巳は表情を見れば、嘘を付いているかどうか、すぐ分かってしまう。
「綺麗な人……」

有栖川も初めて私を見るような様子だった。
「祐巳」
私は名前を呼んでみた。
「へっ？」
この間抜けた表情、祐巳に間違いは無かった。
「どうして私の名前を知ってるんです？　どこかでお会いしましたっけ」
「祐巳さんのお知り合い？」
祐巳はフルフルと首を横に振って有栖川に否定をした。私の事はやっぱり知らないようだ。
「私はあなたの事を詳しく知っているわ、福沢祐巳」
祐巳の顔から血の気がサーと引いていくのが分かった。明らかに恐怖している。
「祐巳さん、逃げようっ！」
「う、うん」
「お待ちなさい！」
「祐巳さんあの人、足速い！」
直ぐさま私は祐巳達に追い付いた。
「観念しなさい、どういう事か説明してもらおうかしら？」
「ごめんなさい、恐かったのでつい」有栖川の方から謝罪がきた。

「あなたには訊いて無いわ、私は祐巳に訊いているの」
「逃げようと言われたから、条件反射で」
「呆れた。それで祐巳、これは何のサプライズかしら？」
「え、何の事でしょう？」
「みんなして私を騙そうとしたじゃない、それが何のつもりだったのかって訊いているのよ」
「えっと、その、意味が分かりません、初対面の人を騙すとか」
「ここまできてしらばっくれるつもり？」
「本当ですってっ！」
私は愕然とした。祐巳の表情には偽ってる様子が無い。本当にここは別世界で、この祐巳は私が知らない祐巳なのだろうか。
ここでふとポケットに入れていたものを思い出し、取りだして見せた。
「これを見ても、まだ言えるのかしら？」
「あれ、これって祐麒のだ」
「安来節であなたが使った手ぬぐいよ」
「ええっ!!　踊ったのは祐麒です！　私は安来節なんて踊りませんし、踊れません！」
「光の君……あ、前生徒会長の事なんですけど、ユキチが命令されて踊った事があったから、それを見て祐巳さんと勘違いしてるとか？」

「優さんに？　そんな事があったの？」
「あ、あのっ」
有栖川が何か気付いたような素振りで質問をしてきた。
「お名前を伺ってもいいかしら？」
「あらいやだ、必要無いと思って名乗って無かったわね、私は、お……」
本名で答えようとしたが、こんなおかしな茶番で真面目に答えるのは不愉快だ。こういう部分が、あまのじゃくと言われる所以なんだろうと自覚しつつ、ここでは、こう名乗る事にした。
「オードリー・ヘプバーン」
「……」
沈黙。さすがにこの名前は無かったか、失敗したと思った瞬間。
「か、かっこいい！　まるでイギリス人みたいな名前ですね！」
「そ、そうよ、帰国子女ですもの」
「良いな、私そういうの憧れてるんです」
有栖川のノリの良い反応とは対照的に、祐巳の方は反応が鈍かった。よく見ると小刻みに震えていた。
「あなたが、あのオードリーさま？……外国にいらしたんですね、道理で探しても見つからないわけだ」

祐巳は涙を浮かべながら、嬉しそうだった。話が見えないけど、どうやらこの名前だと接点があるらしい。ここは調子を合わせてみようかしら。
立ち話をするにしては長くなりそうなので、場所を近くのファーストフードに変えて、話の続きをする事にした。

「えええええっ!!」
「あなたってば、こっちの世界でも落ち着きが無いのね」
「す、すみません。だって私がオードリーさまと、ス、スールだなんて、想像もできないし」
私の世界での人物関係を、かいつまんで説明した。その後の祐巳は百面相を繰り返している。私がよく知っている祐巳だ。
「気にしないでください、祐巳さんって時々こうなりますから」
「知っているわ」
「さっきの手ぬぐい、もう一度見せてもらえますか？」
有栖川は何か気付いてるのだろうか、真剣な眼差しで手ぬぐいを見つめてる。
「鍵をそろえるべし、やっぱりこの文字に見覚えがあるわ」
「どこで見たか覚えてる？」

「多分、ユキチが使った時に見たのだと思う」
手がかりが掴めそうなのに、手がかり無し。これでは期限の二日なんてあっという間に過ぎてしまうだろう。
「せめて書いた人が分かれば良いのだけれど」
「それなら分かりますよ」
「本当!?　誰なの!?」
「光の君……柏木先輩です」
「優さんなの？　言われてみれば確かに優さんの筆跡だわね」
仕組んだのが柏木優。理由は分からないが、これくらい手の込んだ芝居は、やりかねない人物である。
「本人に確かめた方が早いわ」
私は柏木家に電話をかけた。優とは従兄妹という設定は同じだったので話はあっさり通った。あいにく優本人は留守のようで携帯にも繋がらないとの事だったけど、容疑者は特定できたも同然だし、私は少し安堵した。
「この手ぬぐいって、どこにあったんですか？」
さっきから百面相してるだけの祐巳と違って、有栖川は積極的にこの話題に付いてくる。

「薔薇の館よ、リリアン女学園の中」
「部外者の私達じゃ、入れない場所ですね」
「そうなるわね」
「誰が何のために、わざわざそんな場所へ置いたのかしら？」
「私が知りたいわよ。あなたさっき、これを見たって言ったわよね」
「はい」
「祐麒さんが使ったのっていつ？」
「去年の生徒総会の時だから、五月だったかしら」
随分と前である。その時に書かれたものなら、この件とは無関係と考えるべきだろう。手がかりどころか、振り出しに戻ってしまった。
「でも」
「でも？」
「字が変わってる気がする、少なくとも『鍵』なんて事は書いてなかったわ」
嫌な予感が走った、その時。
「きゃあ！」
「ご、ごめんなさい！」
有栖川の横を通ろうとした別の客が、ぶつかってその拍子に手に持っていたコーラを有栖川の肩から胸へ、ぶっかけてしまったのだ。

「大丈夫？」
「うん、上着が濡れただけだから平気、中までは染みてないから」
有栖川はそう言って制服の上着を脱いだ。上着の下のブラウスを見た私は目眩を起こした。
「ど、どうしたの？」
「胸が」
「胸がどうかしたの？」
「どうして、あなたに胸があるのよ！」

確かめさせてもらったけど、有栖川の胸は本物だった。平均サイズくらいの。
「あなた、私に抱きついてみて」
「え？　わ、私にはそんな趣味は！」
「いいから、抱きつきなさい」
「は、はいっ！」
有栖川に抱きつかれても全く平気だった。それどころか気持ちいいとさえ思ってしまった。
これは柏木優が仕掛けた芝居で、祐巳は催眠術か何かで操られてるんだと、私の中でそう解釈された話を終わらせようと考えていた。

だけど、有栖川が本物の女の子になっているなら、その解釈は変わる。本当に別世界に来てしまったと認めざるを得ない。
「薔薇の館へ行ってみたい」

さっきから百面相を繰り返していた祐巳が、目を輝かせながらこう言った。
「私、オードリーさまのお話を聞いて色々想像してる内に、薔薇の館へ行きたくなっちゃいました」
百面相していたのは、祐巳の中で様々な話が展開していたからのようだ。
「そうね、ここにいるよりか進展がありそうだわ」
私は同意して薔薇の館へ案内する事にした。警備の目をかいくぐるのは大変だったけれど。

「高等部ってこんなだったんだ、校舎や図書館以外の場所って初めてだから新鮮」
嬉しそうにリリアン女学園を見学する祐巳と有栖川。
「私、志摩子さんや由乃さんに会ってみたい」
「そうね、会ってみるのも面白いかもね」
祐巳を知らないという志摩子や由乃ちゃんに会わせてみると、どうなるか興味があった。こちらの世界でも仲良しになれるのだろうか。

「ちょっと志摩子を借りるわよ」
環境委員の会議中に割り込んだ私は志摩子を連れ出した。オマケも一緒に。
「志摩子さんをどこへ連れ行くつもりですか」
「薔薇の館よ」
「何をなさるんですか」
「あなた達は黙って付いてくればいいのよ」
「乃梨子、紅薔薇さまのおっしゃる通りにして」
次に保健室。
「由乃ちゃん、ちょっといいかしら？」
「少しだけなら」
最後に薔薇の館へ。
「お待たせ」
「えっと、どなた？」
「誰？」
「この子が祐巳よ」
「疲れたわ、中に入ってお茶にしましょう」
紹介もそこそこに、みんなを二階のビスケット扉の向こう側へ案内した。
「祥子、どこへ行ってたの、心配したよ。あれ？　お客様？」

「お茶は大勢で飲んだ方が美味しいと思って」
「カップ足りるかしら」
「ああいいよ、由乃。私がやるから」
「私達でやりますから、黄薔薇さまと由乃さんは座っててください、ね、乃梨子？」
「しょうがないなあ」
「ここが薔薇の館……うん、想像通り」
「どう祐巳、感想は？」
「とても素敵です」
「建物がかしら？」
「建物もですけど、令さま、志摩子さん、由乃さん、乃梨子ちゃん、みなさん素敵です」

「嬉しい、ありがとう。祐巳ちゃんだっけ？　ゆっくりしていって」
「うふふ、祐巳さんには特別美味しくお茶を入れて差し上げないとね」
「ありがとう、褒めてもらっても何も出せないけど。こうして座ってるだけだから……」

「全部で七人ですよね、カップが六個しか無いんですけど」
「お客様用がそこの棚にあるよ」
「あー、あった。ん、なんだろうこれ」

「乃梨子どうかしたの？」
「もしかして、これって重要な書類なのでは？」
「ちょっと見せてくれるかしら」
私は乃梨子ちゃんが棚から見つけた書類を見て、驚愕するしかなかった。
「祥子、何の書類？」
「これは……」
「なにこれ？『解除契約書』って」

『解除契約書』
『この書類が存在してるという事は、小笠原祥子、支倉令、福沢祐巳、島津由乃、藤堂志摩子、二条乃梨子、が存在してるはずである』
『それが鍵。あなたは解答を見つけ出した』
『これは解除の手続きを行う契約書である。承諾した場合、あなたは時空修正の機会を得る』
『ただし成功の保障はできない。帰還の保障もできない』
『解除契約は一度きりである。実行ののち、契約書は消滅する、また承諾しなかった場合でも契約書は消滅する』
『上記内容に承諾できる場合は、承諾印を。できない場合は、破棄の印を、押印する

こと』

「考えるまでもないわ」

「時空修正って何？」

私は誰かがした質問に答える事もなく、承諾の判子を書類に押した。

その瞬間、世界が真っ白に包まれた。

――解除契約、成立しました。

一瞬の出来事だった。どういうわけだか私は外に立っていた。よく知っている風景。マリア像の前の銀杏並木。木々は実っており、随所に実が落ちていた。コートを身に纏ってなかったので、少し肌寒いと感じたが、ほんのちょっと動けば気にならなくなった。冬から秋へ季節が逆戻りしたかのようだ。

マリア像の前を歩く生徒が一人いた。後ろ姿ではあったが、それが誰だか、すぐにわかった。

「お待ちなさい」

私は凛とした声で、その生徒を呼び止めた。

「はい」

その生徒は立ち止まり、ゆっくりと優雅に全身をこちらへ向けながら、その姿を見せた。

「あの……。私にご用でしょうか」

この顔、この声、間違いなく福沢祐巳だった。ちゃんとリリアン高等部の制服を身に纏っている。

私は元の世界に戻ってきたのだ。祐巳、会いたかった。私が知っている、私の妹。

「呼び止めたのは私で、その相手はあなた。間違いなくってよ」

さっきまで違う制服の祐巳と会っていたせいか、祐巳の制服に違和感がある。よく眺めていると違和感の原因に気付いた。

「持って」

私はいつの間にか手にしていた鞄を祐巳に預けた。言われるままに鞄を受け取った祐巳の首の後ろに、そっと両手を後ろにまわした。

祐巳は目を閉じて、じっと待っている。

「タイが、曲がっていてよ」

「えっ？」

「身だしなみは、いつもきちんとね。マリア様が見ていらっしゃるわよ」

祐巳から鞄を受け取り、先に行くからと伝えて校舎へ向かった。

様子が変だ。生徒の顔ぶれが若干違う気がする。違和感というより懐かしいという表現が合ってるかもしれない。
「ごきげんよう、紅薔薇さま」
少し声が遠かったが、確かにそう呼ばれたので、ごきんげようと挨拶を返そうと後ろを振り返ったその時。声をかけた相手は私ではなく別の人に向けて発していた。その声の先には……リリアンの制服を着こなした水野蓉子さまがいた。
「お姉さま……どうして」
悪寒が走った。
「ごきげんよう、紅薔薇のつぼみ」
「ごきげんよう」
後ろで交わされている挨拶が不吉に感じて、私は振り返った。
「な……」
私の目の前に、小笠原祥子がいた。

目の前が真っ暗になった。眠っていたのだろうか、それとも気を失っていたのだろうか。

目を開いた時、入ってきた視界は、銀杏並木だった。そのうちの一本に寄りかかるように、私はしゃがみ込んでいた。

今度はコートを身に纏っている。けれど辺りは薄暗く寒い。まるで冬の早朝のようだ。ギンナンの実は落ちていなかった。

マリア像の前を歩く生徒が一人いた。後ろ姿ではあったが、それが誰だか、すぐにわかった。

その生徒はマリア像の前に立ち止まり、手を合わせている。それ自体は珍しくはない。ただ、その生徒は鞄から取りだした小さな箱を握りしめたまま、そこから一歩も動かなかった。

「瞳子ちゃん、どうしたの」

頭の左右に縦ロール、その生徒は優雅に振り向きつつ全身をこちらへ向けた。

「ごきげんよう。祥子お姉さまこそ、こんなに朝早く珍しいですわね」

「あなたは、福沢祐巳について知っているかしら？」

さっきの世界とは違う。この世界に祐巳は存在するのか。先ずはその事を確かめたかった。

「下級生に人気があるってことですか？　それとも個人情報についてですか？」

「そう。知っているのであれば、それでいいわ」

「はあ……」

瞳子ちゃんの返事で確信した。ここは祐巳が存在する世界。戻ってこれた事を。
瞳子ちゃんは箱から饅頭のような形をした黒い物体を取りだしていた。無機質なそれは食べ物では無さそうだった。よく見ると中央に白いボタンのようなものが付いている。
「瞳子ちゃん、それ何？」
瞳子ちゃんは箱から一枚の用紙を取りだし、手渡してきた。
「説明書です」
「何これ、気にいらない人を消してしまうスイッチって書いてあるじゃない」
「気にいらない人を消してしまっていいものか、マリア様に相談していました」
「何を馬鹿げた事を言ってるの、そんな事できるはず無いじゃない」
「そうですわね、馬鹿げてますわね」
カチッと音がした。瞳子ちゃんの指先がスイッチを押していたのだ。
「え……」
「何を驚いてるのです？　こんなもので人が消えるわけありませんわ」
「そ、そうよね……念のために訊くけど、誰を消そうとしたの？」
「祥子お姉さまです」
「え？」
「お姉さま消えてないでしょう、これが現実ですわ」

スイッチと箱を鞄に入れて瞳子ちゃんは、校舎の方へ歩き始めた。
「ごきげんよう祥子お姉さま、今のは冗談です」
振り向いて笑顔で言った瞳子ちゃんは、とてもにこやかだった。
「瞳子ちゃん」
「はい？」
「今日って何月何日？」
「十二月八日ですわ」
「時間は？」
「午前六時を過ぎたくらいでしょうか、さっき時計を見た時、それくらいでしたから」
「そう、ありがとう」
瞳子ちゃんが言った日付が正しい事は、他の人達にも確認したので間違いなかった。
祐巳がこの学校に存在する事も。

そして昼休み。薔薇の館で私と令は二人きり、お弁当を広げてクリスマスパーティーについて、あれこれ話をしていた。
「それでね、祐巳ったら、今年は絶対手作りするって言うのよ」
「祐巳って誰？」

「え？」

to be continued…

# あとがき

ごきげんよう。見月七蓮です。実はエンドレスエイトでした。というオチで続きものになってしまいました。

今回の新刊はツイッターから生まれました。らんちさまから発せられた『福沢祐巳の消失』に触発されて、自分も書いてみようと思ったのが、きっかけです。劇場版『涼宮ハルヒの消失』を観たばかりで高揚していたというタイミングも重なったのが好材料でした。

タイトルをそのまま使用する事に快諾してくださった、らんちさまに感謝です。

初の試みとして、ツイッターでプロットをサークル外に公開してみたところ、らんちさま、須駕孝平さま、QQQさまより、面白いと好評をいただき、同人誌として発行する事を決めました。その時、プロット内容に関して貴重なご意見もいただいたのですが、反映させられなかったので、別の機会に補完させてください。

編集ソフトに今回LaTeXを使用しているのですが、その話をしたところ、TomOneさまから貴重なソースを参考用としてご提供いただきました。

こうしてツイッターで繋がったご縁で、作品がひとつ生まれた事は、今後の作品作りの方向性として良い指標となりました。

サークルメンバーには毎度の事とはいえ、滅茶苦茶な進行で迷惑かけて申し訳ない

と思いつつ、頼れる仲間の存在に感謝しました。
ご協力くださった全ての皆さまに、心よりお礼申し上げます。
ここまで読んでくださった皆さま、ありがとうございました。
次回作でお会いしましょう。

あ、どこにも書いてなかったけど、これは『マリア様がみてる』の二次創作小説です。実写映画版が楽しみです。

二〇一〇年五月二日　見月七蓮（Twitter @32ki）

**発行日**　2010 年 5 月 4 日　初版発行

**誌　名**　福沢祐巳の消失

**脚本・表紙**　見月七蓮

**挿　絵**　セイト

**編　集**　TCE

**企画原案**　らんちさま (gokigenyou.jp)

**スペシャルサンクス**

須駕孝平さま（謎の良い子団）
ＱＱＱさま（有画堂）
TomOne さま（PARALLEL ACT）
常盤かぐら

**発　行**　Chipuna
http://chipuna.com/